

エスニシティ論

この講義では問題設定としてはホブズボーム「ナショナリズムの歴史と現在」(浜林他訳、大月書店)を参考とした。近代のナショナリズムとネイションの歴史(主にヨーロッパ)をバランスよく概観し、最後に「ネイションとナショナリズムはかつてそうしたものとして描かれてきた政治的実体を、あるいはそうした言葉で描かれてきた感情さえも、分析はおろか、叙述するにも適切な言葉でない。ネイションーステイト(国民国家)の衰退とともに、ナショナリズムも衰退していくこともありえないことではない。」そのかわり、スプラナショナリズム(ネイションの枠を超える地域の政治的アイデンティティを擁立しようとする思想と運動—EUなど)とインフラナショナリズム(ネイションの下位に位置する地域住民のアイデンティティをネイションと同じように擁立しようとする—スコットランドの動き)が登場すると予測している。

この本に興味を持ったのは次の文章である。「正々堂々、安らかに、ウェールズ語を死なせよう。私たちはこの言葉に愛着を感じるが、その安楽死を延ばしたいと思うものは誰もいないだろう。だが、もし殺されるのであれば、それを阻むためにはどのような犠牲もいとわないだろう。」これ以前にウェールズ人は「宗教や詩の強力な媒体である自分たちの言語が、19世紀世界の文化の中であらゆる目的にかなう言語かどうかを疑った—つまり2ヶ国語使用の必要性和利点を考えた—」「英語を話すウェールズ人には、全イギリスの職業に就く可能性があることを彼らが自覚していたことは疑いないが、だからといってそれが、彼らの古来からの伝統との感情的絆を弱めるものではなかった。このことは、自分たちの言語が結局消滅してしまうことを甘受した人々の間でさえ明らかである。」

チェコ生まれのカール・カウツキーはウェールズ語の40年後、次のように言っている。「民族の言葉はますます家庭内の使用に制限されていくだろう。たとえ実際にはあまり役に立たないとしても、家庭で代々受け継がれてきた家族の古い家具のように、それは何かしら尊敬の念を持って取り扱われるだろう。」

私が調査をしている中国新疆ウイグル自治区では、ウェールズ語と同じ状況にウイグル語がある。進学や就職のためには中国語を習得する必要がある。文学などではウイグル語での出版はあるが、現代社会に必要な科学的知識は中国が必要となっている。このようなウイグル語の運命と重なるものがあつたからである。